

父、受難の時代に生きた父の生涯を貫いて居たもの、それはやはり自分のレールの上を唯超然と生きる事であった。

東京美術学校在職中、時折斯界での著名な先生方が家に来られ、美術については何の知識も趣味もない父との対話はさぞ無味乾燥で、先生方にもさぞお気の毒な思いをさせて居た事と思うが、それでも作品を頂いては応接間の壁に掲げたり、マントルピースの上に置いたりして、戦争がはげしくなるにつれ、空襲も度重なり幾度も薦められはしたが、遂に疎開しようともせずに最後まで自分の身辺に置いて焼き尽くして了った。現在残って居たらしいずれも大変貴重なものばかりであったが、頂いた方への感謝の気持ちで自分の傍に置いて居たのかも知れない。戦争中も当時の美術学校には自由な風潮が残って居り、当然当時の政府当局から戦争遂行に非協力だと圧力がかかり始め、相当数の教授の方々の整理が問題となり、校長たる父への弾圧という形で迫って来た。そんな状況の中でも私共には何一つ語る事なく、或る日突然その職を辞した。

私はそれまで何も予知する筈もなく、その日のラジオ・ニュースで辞任を知った。後で父の語るところによれば「芸術と云うものは自由の中でこそ生まれ育つものだから、自由な風潮がなければ美術教育と云うものは在り得ない。先生方に辞任して頂くことは、自分が校長としては出来ないから、先づ自分が辞めなければならなかったのだ。」と説明して呉れた事を憶えて居る。知識も趣味もなかった父が、美術教育に示した理解、そして殆んど生涯を学校教育行政に打ち込んで来た父としては当然ではあるうが、

如何に苦悩したであろうか。当時の事だから生活の問題もあったであろうが、自分の主張、自分の主義を正しいと思ひ込んで絶対に貫き通そうとした態度が貫かれたのであるけれども、私共には容易に心境を打ち開ける事はなかった。唯一人冥想し、苦悩し、決断した。私には父のとった当時の決断と行動、それまでの半生の官僚としての人生を、自ら退官して、自分のレールを踏み外さなかった事は、私にとって今に生きる教訓となった。長いその生涯で、その職場で、共に働き協力頂いた方々にも本当に心の中を語ることがあったであろうか。それだけに色々と御迷惑も掛けたと思うのだが、それ以上に本人の苦悩は深かったと想像するのである。

澤田は昭和十九年五月二十日、本校改革が断行された際に退官する。その後一時期東亜同文会に勤務したのち、昭和二十一年に東京女学館理事、次いで理事長兼館長に就任し、同五十年二月七日に在職中死去。前出『追悼』はその人物を知る上で最もまとまった資料と言える。

#### ⑧ 故正木直彦学校葬

昭和十五年三月二日、元本校校長、名誉教授正木直彦が死去した。本校はその功績に鑑み、空前絶後の学校葬を挙行了した。また、正木が会長をつとめていた図画教育奨励会は機関誌『美育』第十六巻第五号（昭和十五年五月）を「正木会長追悼号」として発行。関係者十九名の追悼文と正木の履歴、葬儀および告別式の記事、写真を

掲載した。一部を転載する。

### 正木先生の葬儀及び告別式

正木先生の御葬儀は三月五日東京市小石川區音羽護國寺に於て東京美術學校の校葬で執行されたが、葬儀場は朝來掃き潔められて嚴肅崇嚴のうちに、松浦文部大臣、有田外務大臣、吉田厚生大臣、藤原商工大臣及び朝鮮總督府政務總監大野綠一郎、臺灣總督府總務長官森岡二郎、其他横山大觀、竹内栖鳳等名士美術家等よりの大獻花數十、堂の内外を飾り、參會者亦堂の内外に溢れ、引つゞく告別式は參會者三千餘名に及ぶ盛儀で、故人の徳を偲ばしめた。式次第及び弔辭の一部等は左の通りである。

尙先生の御病氣中御見舞を賜り或は葬儀に際して御代拜のありたる各宮家は次の通りで遺族並に關係者は難有さに感泣されてゐる。

秩父宮家 東伏見宮家 久邇宮家 李王家

### 十三松院直方大覺大居士葬儀次第

於東京小石川區音羽護國寺

昭和十五年三月五日執行

三月五日 正午 出棺

午後零時三十分 護國寺着

零時五十分 喪主千冬氏以下諸員着席

一時 各宮家御代拜

### 讀經

一時二十分 弔詞

後室燒香 親族燒香 芝田〔徹心〕葬儀委員長以下委員參列者燒香

一時五十分 住職佐々木教純導師以下退出、親族總代及葬儀委員

長挨拶

二時 僧侶着席 告別式開始

三時 終了

三時十五分 落合火葬場に向ふ

四時 入爐

五時三十分 閉爐

六時 遺骨を捧じ自宅に向ふ

正木の死去に際しては『美育』の外に『美術日本』『美の国』その他に追悼特集が生まれ、各方面からの追悼文が寄せられた。その中の結城素明の文を転載する。

### 正木直彦先生

先生は趣味の廣い人で、事美術に關しては洋の東西を問はず、新古の別なく、また種別なくあらゆるものに通曉してをられた人で、殊に鑑識家としては當代稀に見る第一人者であつたらう。

そも／＼先生は若い時から美術方面を専攻された人ではないが、美術に對しては何かしら青年時代から因縁のあられたといふ事は先生の「回顧七十年」にも出てゐる様である。

極く若かつた時代に古畫を得られたといふ話をきいた事があるがさういふ點から考へても、先生は美術に對しては青年時代から

人並以上に關心が深かつた様に思はれる。

大學を出られてから奈良縣の郡山中學に奉職されたのであるが、丁度同窓であつた、福原前院長さんが奈良縣廳の書記官をされてをつたので、二人で力を合はせて、奈良古美術の行政……例へば、調査、保存等に關して在職四年の間御兩人共に力を合はせて盡力された様である。

その後文部省に來られて大臣祕書官となられたが、その時代は今の如く美術が學藝科内に包含されてをらず、特に美術科といふものが設置されてをつた時代で、先生はその科長になられた時もあるのである。

明治三十三年即ち西曆一九〇〇年に萬國博覽會の開催された折、日本側の出品もあつて、その美術品の事務に携つて先生は赴かれた。

この機會を利用して先生は西洋美術を深く研究して來られ、歸朝すると同時に美術學校の校長に就任されたのであつた。

本來は本格的に古美術の好きなどころに東西の美術を勉強されたのであるから、その造詣の深さ、眼識の高さ、學究的な正確さは比類ないものと言つてよく、殊に工藝に關しては、先生程詳しい人はないであらう。

前期文展時代に御行啓のあられる御砌なども、先生は何時も一人で御説明申し上げられたやうであつた。

何時も一つの新しい作品を説明される場合でも、そのよつて來る歴史を話されて、これは何處で發達したものであるか……さういふ點も實に微に入つて詳しかった。それが陶器なら陶器、金

工なら金工の、その洋の東西を問はず、その歴史と沿革がすべてに詳しいのであるからただ驚くほかはない。

學校に來られてから勉強をされたこととは思ふが、元來出來た人ではなからうか。

殊に晩年は茶事、佛教等に強く興味を持たれ、それらも一つの信仰から入られたものゝ様で、晩年は毎朝御夫婦で、護國寺に參られて御經をあげてをられた一事でも、その間の消息をよく窺ひ得られると思ふ。

またさうした信仰の深さを窺ひ知る一二をあげるならば、太子奉讚會の設立の當時新年狀にまで、法隆寺保存の念願をしたゝめてをられたし、武藏野沿線中村橋在の首繼ぎ地藏のその首を寄進した因縁ばなし、また、法隆寺夢殿の御厨子建立のことなど枚擧にいとまない程である。

殊に此の夢殿の厨子建立は、再建ではなく、本尊に比して厨子は後世の作で、見劣りするが故に畢生の仕事として立派な御厨子を建立したいといふ念願であつたものである。

それも既に九分九厘まで完成して、愈々四月下旬に落成式を營む運びであつたのだつた。それをみづして逝かれた事は實に残念である。

先生が美術學校時代に遺された業績は殊に美術教育、美術行政の上などに色々あるが、殊に感謝に耐えない事は、澤山の參考品を買つて置かれた事である。

岡倉先生も、今泉雄作先生の様な鑑識家の協力によつて種々のものを集められて、中には國寶的なものも澤山あるが、正木先生

は何ををかれても古美術品を蒐められた。先生の蒐められた作品の数は實に夥しいもので、それはひとり、日本、支那の作品を論ぜず、あらゆるものを蒐めてをかれたのである。

一方先生の手によつて國華俱樂部といふものが設けられ、美術學校以外の美術團體として其の興隆、發展について懇談的に盡されたものである。その俱樂部の所有であつた「伊香「保」樓」をあの大地震の前に圍柱會に譲り渡されたが、灰燼に歸する前に他人にゆづつたおかげで、株主にも迷惑をかけずに濟み、基本金を返済した殘金で、口演録を出版するなどの有益な事業をなされたのであつた。

これなども先生の徳の致すところであらうと考へてゐる。ましてあの大地震で燒失してしまつた古美術品の目録を作つてをかけた事は寔に尊い事だと思はれる。

その他先生については色々語りたし事は澤山あるのであるが、ともかくも、あらゆる美術方面に深い造詣と鑑識を持たれて、實際の上では、種々なる團體の會長をひき受けられるなど、あらゆるものを、一生を通じて獻身的に指導し、又行はれた事は全く感謝に堪えぬ次第である。

これらは全く先生の徳の然らしむるところであらう。

〔『美之國』第十六卷第四号。昭和十五年四月〕

### ⑨ 八田辰之助の起用

昭和十五年四月一日、八田辰之助が助教（鍛金実習担当）として採用された。八田は明治三十八年二月八日香川県に生まれ、同県

立工芸学校金工科を経て本校金工科鍛金部に入學、昭和二年三月卒業して研究生となり、同六年三月に修了した。同八年から富山県立工芸學校教諭の職にあり、金工作家としては昭和六年の聖徳太子奉賛展出品、同八年の第十四回帝展入選（「真鍮線文華瓶」）、同九年第十五回帝展入選（「隴銀電氣スタンド」）などの業績があつた。長く軍籍にあり、昭和十五年現在陸軍歩兵中尉であつた。

### ⑩ 本校設置記念式

十月四日、本校設置記念式が挙行され、卒業生関係之助、石川巳七雄の講演があつた。

### ⑪ 『東京美術學校校友會誌』第十九号

昭和十五年十月、校友會は標題の機関誌を皇紀二千六百年、創立五十周年記念号として発行した。編集兼發行人は森田龜之助である。森田は前年の役員改選の際に會報編輯長となり、「公刊文藝雜誌の追隨に墮し、會報本來の意義を喪失せる『東京美術』を極力排斥し何處までも會報としての名實を永久的に存續せしめる」という主張のもとに雜誌を改題し、その体裁を『東京美術學校校友會月報』に近いかたちに戻し、時あたかも創立五十周年とあつて、學校の歴史を振り返つてみようという意図から、関係者の回想等を満載した記念号として編集、発行した。同誌の目次は次のとおりである。

皇紀二千六百年紀元節に賜りたる詔書

口絵